



「転機：東洋医学再考」

国立精神・神経センター国府台病院神経内科
「医療」編集委員長 湯浅龍彦

物事の転機は予期せぬ形でやって来る。初診で訪れたその患者が語る病歴は興味を引きつけるものであった。パーキンソン病には違いないのであるが、発症からすでに4-5年は経過しようというのに、いわゆる抗パーキンソン薬というものを全く服用していないという。しかも診察をすると半身の症状はきわめて高度であるのに、もう一方はこれが驚くほどに無症状なのである。通常発症後4-5年経過し、服薬を全くしていないという事態そのものが最近ではめずらしいのに、左右の状態のあまりの格差にも驚かされた。この状態を何と理解すればよいのか。そこで重ねて尋ねると、自分は薬大を卒業したあと、思うところあって鍼灸の道に進み、現在は県内某所で鍼灸院を開業しているという。発病後は、診療の合間に、自分で施療していたとのことであった。

つまり鍼治療のみで4-5年経過した半側パーキンソン病ということになる。このような特異な経過のパーキンソン病は2度とは診られないであろうから、ご本人に説明し、同意を得てできるだけ長く、鍼灸師としてやって行ける限りは、このまま服薬せずに経過観察させていただくことにした。結局その後、さらに1年間は抗パーキンソン薬なしで過ごされ、対側にも少し症状が出て来たところで抗パーキンソン薬を開始した。この出会いと経験は、これまで投薬を常識と思っていたことに対するアンチテーゼであり、常識に対して無批判になっていた自分への警鐘であった。と同時に東洋医学に興味を持つきっかけを与えてくれた。その体験談を地方の研究会で紹介したことから、ある時、それまで面識のなかった鍼灸学会関東地方会なるところから講演依頼が

舞い込んで来た。それが縁でその後、千葉で開催された日本鍼灸学会全国大会にも招かれ、鍼灸学会の活動を垣間見る機会を得た。このようにして転機は自然にやって来た。おかげで鍼灸学会千葉地方会の先生方に多くの知己を得たのである。そこで最初に目にとまったものは、確かに西洋医学では治療が困難な症候も鍼灸で治せるという事例であった。しかし、理屈がわからない、機序が不明である。印象としては依然として不可解であった。西洋医学を学んだ者としての習わしで鍼灸の治療の結果を分析的に把握しようとし、西洋医が最も陥りやすい迷路に迷い込んだ。これがなかなか奥深く、一朝一夕には抜け出せなかった。それでも2年3年と経過して、最近ようやく気づいたこととして、鍼灸は決して、疾患を鍼や灸で直に治しているのではないということであった。つまりどういうことかということ、治療の本質は「気」を調整するところにあって、そうすれば症状は自然に治るつまりその人のもつ「自然治癒力」を高めるということなのである。「気」を動かすことに鍼灸の本質があるらしい。

この「気」の働きなるものを頭でわかろうとするとなかなか難しい。近道は体で体験することである。人体は数えきれない細胞の集合体である。それもきわめて精緻に統合された細胞の集まりである。その細胞一つ一つのエネルギーは微弱かもしれないが、身体の細胞の全体が集合すれば、そのエネルギーレベルはとてつもなく大きい。その身体エネルギーのレベルを「気」と理解するのである。例えていえば、火力、水力などと一緒で、「気」には、その個体固有の「量」と固有の「力」、そしてそれが向かう「方向（指向性）」性、「循環性」がある。しかし、残念ながらそれらは多くの場合、ことに一般のわれわれには目には見えない。ただし、鍼灸に熟達した先生方には、「気」の流れがみえるとのこと。正直いって不思議なことである。

鍼灸は病名で病気を治しているのではない。一方、

西洋医学はまず診断ありきであって、ある疾患（病名）に対して特定の治療法が確立されている。結核には抗結核剤、がんには抗がん剤、うつに抗うつ剤というようにである。1対1の対応で治療している。対して鍼灸の見立てはというと、漢方でいうと「証」ということであろうが、患者の「気」をどう判断するのかということにある。対象とする人体の根本に「気」を見据え、この「気」のバランスを調整する。鍼灸の作用によって崩れたバランスを自ずから是正しようとする力、復元力を助け、結果として病が治る。その個体が有する本来の自然の治癒力にまかせるといふところに本質がある。

鍼灸をして、最近よく代替医療といわれる。代替とは何であろうか。代替とはとって代わるべきものである。果たしてそうであろうか。鍼灸の治癒と西洋医学の治療の考え方は全く異なるものにみえる。前者は個別から全体を演繹するのに対して、後者は全体の中から個別病態へと帰納する。つまり両者は元来が物の見方、考え方のベクトルが180度異なる。したがって両者の関係はいわゆるような代替医療では交流点はない。両者の折り合いがあるとすれば、それは補完医療である。補完医療とは、その字句のとおり、車の両輪のごとくお互いに補い合う立場、助け合う技術である。鍼灸医療は決して西洋医学の代替ではない。お互いを補完すべき存在と認識すべきである。

鍼灸には不思議な力がある。これを不思議と思うのは、第一にわれわれがあまりにも東洋医学に無知であり続けた結果であり、体の声を聞く耳を失った結果である。身体は常に自ずから立ち直ろうとしている。その復元力を阻害してはならない。現代医療に携わる人は、身体が保有する復元力をもっと意識しなければならない。その復元力の源はその生命体

が保有するエネルギーレベル、エネルギーのポテンシャルであって、それこそが正に「気」の本質であろう。

あまりにも技術至上主義に陥り過ぎた西洋医学にとって、ここで、かつて忘却の彼方に捨て去られた、東洋の英知、東洋医学の考え方を取り戻すべき時代にさしかかってきたのではあるまいか。脳の科学はまさに東洋の医学がその本質に保有する全体を演繹する立場、統合の学問、統合の思想を必要とする分野である。捉え難いもの、みえないものもあることを信じてチャレンジする。それこそが、科学を切り開いて来た先人の歩んで来た道である。これだけ進んだ現代医学、確かに近代科学に裏づけられた技術の進歩には目覚ましいものがある。であればある程、われわれは今、果たしてこの間の技術進歩に平衡した思想の進歩があったのであろうかと自問しなければならない。余りにも個別、細部にこだわり、全体をみる力を失っているのではなかろうか。技術の進歩に見合って哲学、宗教、倫理、道徳、法律が深達したであろうか。

医学の現場に東洋の英知を取り戻し、進歩した近代医学との調和をはからなければならない。これこそが病める患者を救済する真の総括医療であり、これは世界の中でも日本人であるわれわれだけが到達できる究極の境地となろう。

あの時あの患者との出会いがなかったならば、東洋医学への視点の広がりという転機は訪れなかったであろうと感慨を新たにす。

本日をもって小筆も「刈り上げ」となる。これを転機に「医療」編集委員会に新たな芽吹きを期待すると共に、本誌「医療」のますますの発展を祈る。

平成20年3月吉日